
魔術師と花嫁

オトモネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師と花嫁

【Nコード】

N0835X

【作者名】

オトモネ

【あらすじ】

魔術師見習いである緒方春樹は代々の宿願である不老不死を目指して日々探求を続けていた。とある情報筋から不老不死を実現し得る可能性を持ったモノが存在することを知った春樹はそれを手に入れようと行動を起こすのだった。

0 プロローグ（前書き）

やってしまいました・・・
始めてしまいました・・・

勢いで書き始めた愚かな私を許してください。

0 プロローグ

魔術……。

それは、人為的に神秘・奇蹟を再現する行為の総称であり、魔力を用いて「既に世界に定められたルール」に従い、神秘を起こす術である。魔法と異なり、魔術は何かで代用がきく。ここ数百年間、魔術は文明の後追いをしている状況であり、かつて魔術でしか成し得なかった奇蹟は文明の発達にともないその神秘性をも失いつつあるのだ。前述の通り、魔法は魔術とは異なる神秘であり、その時代で実現不可能な出来事を可能とするのである。現存する魔法はたった5つ。しかし、魔術師にとってはそれすらも一通過点に過ぎず、最終目標である根源の渦への到達へはまだまだ遠い……。

突然だが、俺の……もとい、私の名前は緒方春樹。何を隠そう魔術師……ではなく、魔術師見習いの中学生だ。我が緒方の家は、一応は魔術師の家系である。不老不死の再現を目標としているが、過去に名を馳せた者もなく、典型的な「田舎魔術師」いなかものなのである！別に威張れることではないが……。家族は父、母、私の三人で、一般的な家庭とは少し違うが、それなりに充実した日々を私にもたらしている。そんな我が家には、ある伝統——というか通過儀礼があった。それは、十四歳になると家を出て一人で暮らし、我が家の宿願——不老不死への何かしらの手がかり・足がかりを発見もしくは考察してくることである。無論、こんな小僧が不老不死の「ふ」の字にも掠ることができると期待されてはいない。実際は、ひとりで生活し、自分で工房を持つ為の練習期間なのだ。

そんなわけで、私は実家を離れ、一人で別荘（代々この通過儀礼で使用）がある埼玉で暮らしている。えっ？中学生なら学校は？転校したの？と思われるかもしれないが、実は実家も埼玉、さらに言えば同じ街の中にあるわけで、私としては、寢床が変わった事と、家事を自分でしなければならぬこと意外は大きな変化はなかったわけだ。実際面倒ごとが増えただけで、できることならば家に帰りたい！！っと、これは両親には秘密である。

時は進み、八月。成果が見つからぬ日々嫌気が差し、かねがね計画していた四国への探求の旅を実行に移す。とある情報筋から不老不死を実現しうる物質が四国に存在しているかもしれない、と垂れ込みがあったのだ。ほとんど眉唾物であるが、未だ何の成果も出せず、ただ燻っているのもどうかと思い、リフレッシュも兼ねて私は旅立った。

そう、私が求めているもの、それは・・・・・・・・・・

「人魚の骨」、そして「人魚の肉」なのだった。

0 プロローグ（後書き）

グロくはならないと思います。
ええ、きっと。

1 海底2万マイル（ホントは50m）（前書き）

なんとかできました。

よろしく願います。

1 海底2万マイル（ホントは50m）

人魚とは一般では水中に生息すると考えられている伝説上の生き物である。人魚の存在は早くから知られており、最古の記録は619年とされている。大阪で漁師の網に人魚が捕えられたという記述が『日本書紀』にあるのだ。また聖徳太子が近江国（滋賀県）で人魚に会い、生前の悪行で人魚に姿を変えられたと聞いて手厚く供養したという話もある。鎌倉時代の『古今著聞集』などでは、日本の人魚はヒト状の顔を持つ魚とされていたが、江戸時代後期にはヨーロッパ同様、ヒトの上半身と魚の下半身を持つ姿と伝えられるようになった。

また、日本各地に伝わる人魚伝説は恐ろしいものとされることが多い。現代人が人魚と聞いて想像するものとはかけ離れているのだ。江戸時代の越中国（石川県）では、角を持った全長11メートルの人魚を人々が450丁もの銃で撃退としたといわれる。若狭国（福井県）でも漁師が岩の上に寝ていた人魚を殺した後、その村では海鳴りや大地震が頻発し、人魚の祟りと恐れられたという。このように人魚が恐れられたのは、中国の『山海経』に登場する、赤子のような声と脚を持つ人魚の影響を受けたためといわれる。

一方で、人魚は吉兆の幸せとの説もあり、寿命長久や火難避けとしても崇められたこともある。高野山の麓の西光寺には全長約50センチメートルの人魚のミイラがあり、不老長寿や無病息災を願う人々の信仰の対象となっていたといわれ、現在でも橋本市の有形民俗文化財に指定されている。

「ごきげんよう、緒方春樹だ。今、私は四国は香川県西讃地域にいる。目的？むろん人魚である。京都、大阪を経てここまで来たが、いや、暑い暑い。本気と書いて本気で暑いんだ。思わず目的を忘れて海に飛び込みそうになったよ（笑）」

「ここに至るまでに人魚について確認できたことはほとんどなかった。情報屋^{ソース}から得られたのは瀬戸内海で人魚、もしくは魚人らしきものが目撃されたということだけ。目撃情報が複数有り、そこそこ信頼が置ける情報なのでは・・・と私は考えている。」

四国側の海岸で調べることに4日間で潜水調査はおよそ30ヶ所のぼった。潜水には潜水具をつかっている。魔術でどうにかならないこともないと思うが、今の私の実力では生命維持で精一杯で探索に集中できないだろう。魔術に入り浸って科学技術を軽視する人もいるが、私はそうは思わない。「足りないものは他所から持つてくる」のは魔術の基本である。それと、魔術は万能ではないし、また道具^{ツール}ではなく学問である。まあ、そのあたりの説明は面倒なので省略したい。しかし、このしゃべり方も肩肘張ってる感じで窮屈だな。魔術師はこうあるべきだって言われてるけどさ・・・。

「あまり期待はしていなかったけど、こう何もないとやっぱりショックだな・・・」

本日3ヶ所目の調査を終えて浜に戻ると盛大にため息をついた。いくら息抜きのための旅行と銘打っていても手ぶらで帰るのはやっぱり悔しい。それでも魔術師見習いなんだから。

次の探査ポイントに向かう間は爆睡だった。水中の活動って思ったよりも疲れるよね。

「さて、4ヶ所目といきますか」

気を取り直して潜水開始。徐々に深度を下げつつ潜行していく。深度計は20を過ぎたところか。素人ならばそれ以上潜るべきではないのだが、このとき俺は何かを見つけようと焦っていた。周りが見えなくなっていたのだ。そうでなければ、ボンベのバルブあたりからエアが漏れていることに気がついただろうに……。そんなことはいざ知らず、深度は40に差し掛かった。この潜水具の安全深度は50だからこれぐらいがボーダーラインだろう。

（何だか息苦しいな）

水中では水圧などの圧迫感などから息苦しく感じることはよくあることだが、何ともなかった状態から急に息苦しくなったのだ。

（まさかっ）

そのまさか、酸素の残量計は「E」を指していた。

（急いで浮上をっ／／／／）

腰につけたバラスト（おもり 錘）を切り離そうとするが焦っているせいかうまくできない。どちらにせよ、急速浮上は危険すぎてできたものではないのだが……。水中では10m潜るごとに、水圧は1気圧ずつ増していく。仮に20m潜っていたとすれば3気圧になる。この水深20mの地点から急速に浮上すると、ダイバーの身体にかか

る圧力は一気に1/3に減少するのだ。その場合は身体内の窒素が気化し、気泡となって血管を塞いでしまうだろう。ダイビング中に起こる事故の原因No.1は、パニックを起こしてしまうことだという。海中で何かしらの予想外の光景や事故などに出会ってしまった場合、まずほとんどの初心者ダイバーはパニックを起こし、息を止めて急浮上を行う傾向にある。海中では、レギュレーターが周囲の水圧と肺の気圧を揃えるために働いていて、周囲が3気圧であれば、肺の中も3気圧になるように空気を送り出しているのだ。この状態で急浮上を行った場合、肺の中の空気はどんどん膨張し、最悪の場合は肺が破裂。つまり死ぬ。そのぐらいの知識は有ったはずだが、パニックになっていて、どうにか浮上しようと焦っている。

（まずいまずい、マジで死ぬシヌ・・・）

あれこれしているうちに深度は55を超えていた。バラストが外せなくてなかなか沈降が止まらない。

（だっ誰か・・・）

深度65を超えた。沈降は止まらない。息も苦しい。

（ここまでか・・・）

魔術も役に立たない。いや、そもそもこの状況で使える魔術を俺は知らない・・・。

（思えば何も成さない人生だったな・・・）

目の前が霞んでいった。

（だ・・・れ・・・か・・・）

不意に何かの気配を感じたが、もう限界だった。確認などできるはずがない。

意識を手放そうとした瞬間、春樹は人を見たような気がした。

1 海底2万マイル（ホントは50m）（後書き）

次話からヒロイン登場です！

感想をよろしくお願い致します。

2 未知との遭遇（前書き）

今回はちょっとだけ長くできました。
つたない文章ですが、よろしく願います。

2 未知との遭遇

「ソナーより発令所！右舷後方より魚雷2、急速接近中。到達まで120」

「ダウントリム15。メインタンク注水。深度300。急速潜行。」

聞こえるのは、船体の軋む音、スクリューの振動と男たちの怒声のみ。

「魚雷、依然本艦を追尾中。到達まで90！艦長っ！！」

魚雷の接近に水測員が悲鳴を上げた。

「三番管、^{デコイ}囷^{デコイ}発射。取り舵一杯。」

「取り舵一杯ようそろ。」

「魚雷2、方位01410を通過。っ！！左舷前方、右舷後方より魚雷発射音。急速に近づく。」

「ダウントリム35。前進強速。深度600」

敵は我々を見逃してはくれない…

「前方600で爆雷投下音、数多数」

「二番管、魚雷発射用意。指標十二を狙う。」

魚雷の装填、測距、予測進路の算出。それらを瞬時に処理する彼らは各自、潜水艦という巨大構造物の構成員としての役割をただ黙々とこなしている。

「二番管よろし」

「てっ!!」

「魚雷接近。方位1 - 1 - 4、数2。直撃します!!」

「総員、衝撃に備えよ!」

次の瞬間、立ってられないような衝撃に襲われた。発令所要員も何名か弾き飛ばされている。至るところから漏水が始まった。

「各自被害状況知らせ。」

順次レシーバーから報告が入ってくる。

「後部居住区浸水。」

「機関部火災発生。応援を要請する」

「魚雷発射管室浸水」

ダメージは大きく、船体はボロボロだ。

「艦長!機関が起動しません!推進力0。沈降開始します。」

この艦の実用安全深度は700だ。それを大きく過ぎれば乗員は皆、

海の藻屑となるしかない。

「バラストタンクブロー。機関室、機関始動を急げ！」

「深度650を通過。沈降が止まりません」

「こちら機関室。火が収まりません。復旧は困る」ザザザザー／／／／／」

「機関室、応答しろ！機関室！」

「深度700！危険です！艦長！！」

「そんな……ここまでなのか……」

「深度750」

顔を青くした水測員が呟いた。

「深度80つつ発令所浸水！！」

不意に天井のバルブが吹き飛び、海水が流入する。

「隔壁閉鎖！繰り返し、隔ててわああああ」

水の音と悲鳴が交差する中、艦長と呼ばれた男はただ呆然としていた。迫り来る海水を眺めることしかできなかったのである。

「ここは……はっ!!」

ここは、海辺の岩場であった。俺はどうやら気を失っていたらしい。

「さっきのは…夢？」

いやにリアルな夢だったような気がする。それに、「某赤いオクトーバーを追え」に似ていたような…

「はあ〜」

体から力が抜ける。安心感からくるものだろう。

（死ぬとこだったぜ、まったく。あのまま沈んでいたらどうなってる…いた…ことか…？）

いやまで。どうして俺は生きているんだ？別に死にたいわけじゃないが…。そもそもあの状態からどうやって浮上したんだ？訳が分からない。

「もしかして、俺には隠された力が…って漫画かよ（笑）」

とりあえず、今日の宿に戻ろうか。回復魔術を使っても、これ以上は体が持ちそうにない。

「それにしても、何があったんだろう？」

首を傾げつつ俺はその場を立ち去る。遠くの岩場の人影には気がついていなかった。

そんなわけで本日の宿（民宿）に着いた。名を芙蓉荘という。正直なところ、ホテルのほうがよかったのだが、あいにく海沿いにはホテルはなかった。芙蓉荘は老婆さんとその息子夫婦で遣り繰りしているそうで、夕食時など、4人揃ってみるとまるで家族の食卓のようであった。

「春樹君は中学生なのに一人で旅行なんてえらいねえ」

「（もぐもぐ）いえいえ、そんなことはありませんよ。それにこれは我が家の伝統みたいなものなんです（笑）」

「そうは言つても、埼玉からじゃろ？一人でなんてなかなかできることじゃないきん。」

お婆さんの言葉にうなずく息子夫婦。

「まあ、ただの道楽なん」「ピンポン」ん？」

楽しい食卓に呼び鈴のベルが鳴り響く。

「こんな時間に誰じゃるか？回覧板かいな？」

「はい、どちらさんですかー？」

そういつて娘さんが玄関のほうに見えなくなった。

なにやら話していたようだが、しばらくして娘さんが帰ってきた。後ろに誰かを率いて。

「ん？聡子。その子誰じゃ？」

「ええ、何でも春樹君にようがあるようなんよ。」

「俺？」

三人プラス一人の視線が俺に向く。現れた女の子は長い髪のかわいい子だった。今、「春樹くん」と呟いたような気がする。

「えっと、どちら様でしょうか？」

そう尋ねると女の子は意を決したように話し始めた。

「始めまして、私、瀬戸燦と申します。」

「瀬戸……さん？」

現れた少女からはどこことなく潮の香りがしているような気がした。

「春樹君の知り合いかいな？」とお婆さん。

「いいえ、こちらに知り合いはいないはずです……」

「春樹さん。わっ私、私を…春樹さんのお嫁さんにしてください！」

<沈黙>
>>>>>>>>>>>>>>>>>>

あーお嫁さんかー。うんうん、この子ならいいお嫁さんになりそう
だ。って！

「は？お、オヨメサン？アナタハナニライツテルンデエスカ？」

女の子は続ける。

「あの、突然のことで驚かれましたが、春樹さんに昼間のことの責任を取って欲しいんです！」

[illegible]

女の子は真っ赤になりながら最後まで言い切った。えらい！……じゃなくて！！

「ちよ、ちよつと待ってよ。昼間のことって言っても俺には何かなんだか……」

「まあまあ、最近の若い子は」

「それはさすがに不味いじやろ、なあ春樹くん。」

「はあ、青春ね」

いや、ちよつとまつてよ。知らないよ俺。それに、さつきまでの利口な子供を見る目が、やつちまつた子供をヤレヤレとみる目に変わつてゐるよwww

「人違いとk「夜分遅くに失礼いたしやす」誰？」

見ると、いかにも極道って感じのアフロさんが子分を二人連れてやってきた。渋いなあ…

「ウチ等は燦お嬢の身内の者でございやす。そういうわけで緒方春樹さん、ちよいとご足労ねがいやす。燦お嬢のご両親、ウチのおやつさんが直接会ってお話がしたいと…」

ご、極道の娘さんデエスかー？

「ご同行ねがいやす」

どうやら選択肢はなさそうだ。闘おうにも俺が人並み以上に使えるのはルーン魔術だけだし。それは戦闘に向いてないし。それに、ココの人にも迷惑がかかるだろう。

「わかりました。いきます。」

そういつて荷物のことを頼んでから、極道さんたちに連行されたのだった。

場所は変わって海辺。暗闇の中、かすかに波がうねっているのが見える。

「あの、なんでココに連れてこられたか聞いても良いですか？」

「それでは春樹さん、お先にどうぞ」

そういつてアフロさんは俺を崖から突き落とした。夏といっても夜の海は冷たかった。

（あいつら、俺を殺す気か？）

しばらくすると、例の女の子、燦といったか？が目の前に現れて…

そのまま俺を下に引きずっていった。やべえ、息が持たない…

そのとき俺は目を見開いた。この女の子の足には、足には、鰭がついていたのだ。

（人…魚？）

それを脳が認識したところで俺の意識は暗転した。

「うーん、このままでは…圧…潰」

「…こさん、婿さん！大丈夫ですかい？婿さん」

「ここは？」

「フン、えろろ落ち着いてるようやな。」

広い座敷は豪華なつくりで、壁には大きな水槽…が見えた。もしや…。

「遠いところをよういらつしゃった。わしは瀬戸内魚類連合瀬戸内組組長、瀬戸豪三郎じゃ」

「その妻、瀬戸蓮でございます。」

どうやら、ここは燦という子の家らしい。海中の。ということは、ここにいる人たち皆人魚か魚人？そう考えて、思考を魔術師のものに切り替える。ココで戦闘をして、脱出できるのだろうか？荷物は置いてきてしまったが、ポケットには、ルーンを描くのに必要な魔術礼装”銀の杖”^{シルバースティック}が無くならずに入っていた。それをポケットから見えないように取り出す。

「そちらにご足労願ったのは他でもない、ウチの娘がお前さんを助けたということ…」

俺は前を向きつつ、魔術回路を起動し、足元にいくつかのルーンを^{シルバースティック}刻んだ。銀の杖は魔力を通すと、なぞるだけで線を書くことができるのだ。無論不可視であるが。

「はあ、のお聞いてくれや客人。わしら人魚の掟ではのう、人間に関わって正体を見られた人魚は…死刑ちゆう決まりになっとるんじゃない」

「……………」

「海の泡と消し去られてしまふんじゃ、こればかりはどうしようもない話なんじゃ」

豪三郎は泣いている。それはもう、みつともないぐらいに。だが、そのときの俺の頭には、どうやって脱出するか？そして、どうやって人魚を持ち帰るかだけしかなかった。

「どうじゃ、かわいそうな話じゃろうが？」

「はあ、」

「おのれのせいじゃ、おんどりや！！ウチの燦がなんで人助けして消えなきゃならんのかって言ってるんじゃボケが！！」

身を乗り出してくる豪三郎。

（なら、どうすりゃいいんだよ？）

そんなことを考えていると奥さんが止めに入った。

「ふー、じゃき、わしは考えた。正体見られて死刑いうんじゃったら、正体知ってるもんがいなくなればええじゃないかな」

そして、ニヤツと笑うと、周りに控えていた組員たちが俺のほうに

向かってきたのだった。

2 未知との遭遇（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

お手数ですが感想をいただけるとうれしいです。

3 未知との遭遇？（前書き）

遅くなりましたが投稿します。

10/206:30改

3 未知との遭遇？

「ふー、じゃき、わしは考えた。正体見られて死刑いうんじゃつたら、正体知ってるもんがいなくなればええじゃないかな」
そして、ニヤツと笑うと、周りに控えていた組員たちが俺のほうに向かってきたのだった。

背中を冷や汗が伝う。相手はざっと30人。それも、おそらくは魚人or人魚である。これが自分の工房ならまだしも、ここは相手のホームグラウンドだ。明らかに分が悪い。いや、悪すぎる。

（きつとルーンだけじゃ凌ぎ切れない。撤退する方向で考えなきゃ）

俺は分の悪いことはしない性質だし、だいいち、今回の探索も息抜き程度のものなのだから。「息抜き」が「生き抜き」であって良いはずがない。

あれこれ考えているうちに殺気を飛ばしながら極道たちがじわじわと迫ってきている。それに合わせて俺も少しずつ後退する。ルーンを刻んだ場所まであと10m。魔術の秘匿という問題もあり、一瞬ここで戦って良いものか迷ったが、獲物を前に舌なめずりは三流がすることであり、そして、その一瞬のためらいが自分を殺すのだ。

「野郎ども！ やっちまいな！」

「あんた！（お父ちゃん！）」

蓮さんと燦さん……燦さんと呼ぶのは何か違う気がするから燦ちゃん……の声もここまでヒートアップしたヤーさんたちには届かない様だ。

「クソガキが！死にさせ！」

「玉あとつたるで！」

熱気が集団と共に前進する。俺は同時に礼装を掲げる。

（本当にやれるのか……？いや、やるんだ！！）

迷いは不要。戦闘開始だ！

「「凍結^{イーサ}」、「氷の茨^{スリサズ}」

空中にルーンを書き、その名を唱える。

直後、ルーンを刻んだ辺りにいた10名ほどが氷の茨に飲み込まれた。

「なっなんだこれは？」

「くそつ、身動きがとれねえ！」

突如現れた氷の茨に取り込まれ彼らは動揺していた。それなりに強力なもので、今すぐ破られることはないだろう。

ルーン魔術に必要なことは、「書く」という行為である。これらは主に魔術的な装飾品や武器、防具などに刻まれて効果を発揮することが一般的だが、戦闘中においても、その場凌ぎぐらいにはなっ

たりする。

「てめえ、やりやがったな！」

「何なんだよコイツ？」

今度は俺から距離をとるヤクザ連中。一歩進めが、彼らは一歩後退する。そのとき、一人が不意に後方から切りかかってきた。

「チェストー！！」

鬼気迫る一撃をよるけながらもかわすとお互いに向き合った。

相手の目はギラギラと危なく光っており、無言のうちに「命もろたるで」と凄んでいた。

「はああああああああ！！」

迫り来る白刃を紙一重で…かわすつもりだったが頬が少し切れたようだ。傷そのものは大したことはないだろうが、焼けるような痛みに襲われた。

「もう一丁おおおおお！！」

再び襲い掛かってくる男。俺は右手を前に出し、振りかぶられる刀を素手で止めて見せた。

「……っ！！！！」

一同の驚いた様子をみてそっとほくそ笑む。刀を持った男も動揺し

ている。俺は、そんな彼に人差し指を向け呪いガンドを放った。ガンドは北欧における呪いの一つであり、「人を指さす行為が失礼である」とされるのはこのガンドに由来するともいわれている。ガンドを撃たれると、体調が悪くなり、動けなくなる。今の一撃は、周りから見えないようにほぼゼロ距離から撃ち込んだものだ。周りからは、「刀を掴まれたと思ったら、急に倒れた」ように見えることだろう。ちなみに、刀を掴むにあたっては、手の平に防御エイワズのルーンを書き、さらに強化を施したので怪我はない。

怪我はないのだが、燦ちゃんの目にはそうは映らなかったらしく、しきりに「止めて！」と叫んでいた。愛娘の言葉とあっても、そこは組長である豪三郎氏、一度いったことを撤回する気はないらしい。そんな父に業を煮やした彼女は、深く息を吸い込むと、こう叫んだ。

「止めてって言うてるのに！そんなお父ちゃん大っ嫌い！！」

次の瞬間、燦ちゃんが発した声が衝撃波となって俺の脳を直撃した。他の魚人たちは耐性があるらしく何ともないようだったが、俺は視界がぼやけ、今にも気を失いそうになってしまった。薄れ行く意識の中、氣力を振り絞って前を見ると、そこにはなぜか豪三郎氏が倒れている。

（あ、れ？おれ…攻撃なんて…して、た…っけ？）

心配そうな顔をした燦ちゃんが走ってくるのを眺めつつ、俺は完全に意識を手放した。

「…樹さん、春樹さん！」

誰かの呼ぶ声が聞こえる。でも、もう少しこのままでいたい。だつてとてもやわらかい枕が…枕？

「ん、あれ、ここは…」

「ごめんな、春樹さん。わたしのせいで。」

目の前に燦ちゃんの顔が見える。ってことは、この枕って…。

「私の膝痛くなかった？春樹さん目覚まさんから…」

膝枕でした、はい。それは、魔法もびっくりの柔らかさで俺に安らぎを与えてくださいました、はい。

「見事なお手前でした、じゃなくて。ありがとう、だいぶ良くなつたよ。」

起き上がって周りを見渡すと、大勢いたヤーさんがいなくなり（凍り漬け連中は除く）広間には、俺と燦ちゃん、燦ちゃんのお母さんと血を流して倒れている燦ちゃんお父さんしかいなかった。

「すいませんなあ、うちの旦那は頭に血いのぼってしまつて。まったく、話もできんで…」

燦ちゃんのお母さんは真正面に座ると話しかけてきた。蓮さんはいかにも極道の妻といった感じの女性でその姿は、燦ちゃんにも通じる場所があつた。

「一つ聞きたいんやけど、さっきの氷とかどうやって出したん？」

これについては正直に話すわけにもいかず、俺の特殊な能力であると答えることにした。蓮さんはいまいち腑に落ちないような顔をしていたが最終的に納得してくれた、と思う。

（まあ、あながちウソでもないような気もするし）

納得してもらつてホッとしている俺に蓮さんは

「まあ、春樹君の力についてはおいおい教えてな。それより春樹君。うちらで春樹君と燦の両方が死なんでええ方法を考えたんやけど、どう？」

と、言つてきた。

「え？」

「ねえ、春樹君。うちの燦と…結婚してくれんね？」

「…は？結…婚？」

結婚、主に男女が夫婦になること。結婚、あの子と結婚…。

「その歳じゃちょっと早い気がするけど、燦の正体見たのが身内やったら何も問題ないんよ。」

でも、それって…

「でも、燦ちゃんの意味はどうなんですか？」

やっぱり気持ちは大切だよね。

「じゃかあしいわ！！うちの娘もらうのになんか不満でもあるんか！！」

復活した豪三郎氏も話しに加わる。

「いや、しかし…」

そう、不満などあるはずがない。過程はどうあれ、それで俺の目的は達成されるのだから。だが、身の危険を顧みず、何度も助けてくれたこの娘に恩を仇で返すようなことはしたくない。結婚は女の子にとって…男にとってもだが、人生の一大イベントである。それに、魔術師として借りを作りっぱなしはよくない。こんなことを考えるのは心の贅肉だって言われそうだが…。

「春樹君…」

燦ちゃんの不安そうな声が聞こえる。不安からか、若干俯いていた。

「……わかりました。そのお話、お受けします。」

その一言で、燦ちゃんの表情はパアツと明るくなった。やっぱり女の子は笑っていたほうがいい。

「改めまして、燦ちゃんのお父さん、お母さん。どうか、私、緒方春樹に娘さんをください。」

はつきりと言い切った。しかし、そう頭を下げつつも

（まあ、しかし、一緒にいるだけでも何か分かるかもしれないし、メリットはあるよな）

と思ってしまう自分が、春樹はたまらなく嫌だった。

3 未知との遭遇？（後書き）

感想など、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0835x/>

魔術師と花嫁

2011年10月10日09時41分発行